松尾邦之助逝いて一年

三浦精一

もう一年が過ぎた。五月七日、個の会の人たちが集って故人をしのんだ。五十人近く集った。添田知道さんは病苦を押していろいろ世話して下さった。

石川さんは「日本では個人主義が発達せずに今に至った」と言っていたが、松尾さんも同じことを考えたのだろう。日本人にとって「個をみつめ、個を追及し、個の自由を求める」こと、このことが欠けているために自主的に生きようとする意欲がなく、権力主義的思潮に共鳴しやすく、マルクス主義が横行する。共産党の幹部のオポチュニズムによってプロレタリア独裁という信仰箇条をすてようとするまで、一党すべてこの信仰を守って来た。これが日本的美風だろうが、こんなバカナ信仰を個々の党員が何故反省することができないのだろうか。反省して幹部を突き上げることは議会でのアラ探しや、アゲ足とりとは異った正しい自由への行動ではないか。「党の統制」というのか。この統制の名で自民党派閥は選挙資金供与をめぐる親分子分の離合集散で統制され、公明党は創価学会信徒の票で統制を受けている。党幹部の利害を中心に奴隷的に盲従するのが現在の日本の政党ではないか。どこに「個の自覚」「個の自主独立」「個の自由」があるのだ。個の自覚や個の自由に根ざすからこそ「連合」があり「連帯」があるので、個の自覚がなく、他の個の自由を束縛し、統制しようとするところに権力主義が生れる。自覚がなく、他に追随するところに、権力主義的左翼における盲従的奴隷的態度が生ずる。日本でマルクス主義やレーニン主義が繁栄するのも、マルクスやレーニンの著書を古典とし、信経として、それを信仰する学者や党の有力者の説をさらに鵜呑みにする奴隷的体質による。

こうした徳川時代以来の日本的体質の中で松尾は独自の生き方をした。辻潤、大杉、そして松尾、それぞれに独自に生きた姿は違う。しかしそこには強い個の反逆がある。ある人は語った。鳥取だか島根の教職員組合の大会で松尾を講師に招いた。その時松尾は県の教育委員会に毒づき、教職員組合に毒づいたという。

松尾の死後、「エロスの探究」が発行された。これは添田さんによれば、松尾の死後の書斉整理で発見された「わが性学」という膨大な原稿を出版したものだという。

その冒頭の一節に松尾は「性の問題に取り組むということは、人生と対決すること」だ、と言っている。私はまだ読んでしまってはいないが、この本は、性に関して

の綜合的な研究書であることが、目次を見ただけでも分る。そして豊富な写真版も洋の東西にわたっている。生理学的に性の構造、生物学的に動物の性、社会学的に権力と性を語っている。添田さんはさらに、下駄ばきでパリの街を歩きまわった辻潤の墓碑をたてるのに、松尾が恐ろしく情熱をもやしたこと、また岡本文弥の新内を聞いて、「あれをきいていると、死にたくなってくるなあ」と洩らした松尾の中に、遠州生れの日本の土人の姿を見出したことを書いている。

映画　サンチャゴに雨が降る

一九七三年九月十一日、チリの首府サンチャゴに軍事クーデターが起き、社共連合で選出されたアジェンデ大統領が武器を執って闘い死んだ。ブルガリヤ・フランス合作のこの映画は事件の経過を追いながらその反革命性をさりげなく、しかし内に秘めた激しい憤激で訴えている。

あの日、個人的な感想を述べるなら、私はヤマモトアキさんと岩佐老の墓前祭に参加する為、千葉行きの電車に乗っていた。通路に立ったまゝ、千葉の百姓をもって任ずる人からチリの軍事クーデターをどう思うかと訊ねられた。地球の裏側にあり、チリ硝石の生産地としか記憶していない国の政治情勢は知る由がなくにわかには答えられなかった。以後注意してわが陣営の外国誌紙に注目していたがはかばかしい論説は見えなかった。その第一の理由はあれが共産主義体制であり、巨大労組を優遇しつつ、中小企業家の反撥を買い、ストの続発で経済的破たんを招来したのが最大の崩壊誘因ということだった。映画では兵営での無気味な動きから始まる。戦車が動きだし、兵士を集めた上官の訓辞はアカこそ亡国のしるしだと言う。そこで行動を起すのだが不満な者は申告しろと言う。結局二・三名が不服従を申しでるがその処置は画面にでないまゝ兵営内での処刑で暗示されている。事件をいち早くキャッチしたフランス特派員の眼を通して、アジェンデ大統領の就任の模様からクーデターまでの経

松尾邦之助逝いて一年、この会には、添田さんが、「川路柳虹、村松正俊、松尾、私の四人会を交互にやったのも、自在放談のたのしさからだった」と書いているその村松氏も見えた。シュペングラーの西洋の没落を完訳された方だ。トインビーに大きく影響したシュペングラーのこの名著がさらに世に出るということだ。この会を契機として、さらに松尾が大きく若い者の心の中に生き返ることを祈らずには居られない。

過が画面では交互に重ね合わされて現われる。ここでこの事件の最大の黒幕はＣＩＡだとされ、チリ銅山の国有化と米国系電電公社の接収をめぐっての陰謀だと摘発している。

映像の利点は論理以上に情感に訴えることだ。何気なく映るスラムと対比される白亜の高層建物はそれだけで彼地の経済的較差とそこに有得べき政治状況が理解される。更に工科大学学生の歌と踊りの陽気なリズム、これに対して軍隊の若い兵士達の禁欲的なまた何かを憎悪するような眼付きも対照的である。その両者が銃を執って内戦に移り行く様子をカメラアイが追って行く。やがて壮絶な銃撃戦となり、戦車が大統領官邸を砲撃する。アジェンデは一八名の職員と共に戦死するのだが勝利した軍部の報道では自殺ということである。三時間の激突は映画でも同じ時間で活写している。更に市街戦の模様が写り、バリケードと労働者、学園での銃撃戦など幾多の累々とした死者を路上に残して労働者と学生が降伏する。ファシストの残虐はそこから始まるのだ。円形競技場に集められた学生労働者達には見せしめの演技場なのだ。ファシストはこの場合国軍であり、国軍がマルキストは生かして置かないときめたのである。そこで〈あれはアカだ〉と指弾されたら社会主義者だろうが自由主義者だろうがすぐ銃殺である。民衆は立上るだろうか？　銃の台座で撲殺される学生は、勝利の歌を歌うよう強要され、〈必ず勝つ〉と歌う。競技場で両手を頭の上に置かせられた学生達も小声で唱和する。それが更にファシストを興奮させ撲殺の起動力になっている。ラストシーンはノーベル賞詩人ネルーダの葬列で、銃付きの兵士達に監視されながら会葬者は〈チリ万才〉〈アジェンデは永遠に生きている〉と叫ぶのだがバックミュジックはけだるく弦の音を響かせる。

注意深い観客ならこの歴史的事件である軍事クーデターがチリの伝統を守れ、アカの亡国を許すなとのスローガンをかかげ、その実は米国で訓練を受けた小数の軍人達による寡頭政治の始まりで、銅山の国有化はご破算になり米系資本の優遇につながった有様が理解できよう。またバクーニン説の通り〈歴史が明日正義をもたらして呉れるより、今日その訪れをみたい人々には、反革命こそ、その流す血の多量なる故に恐るべきもの〉であることが判るだろう。だが同じ歴史は決して唯物弁証法的必然性をもって歩むとは限らず、現に南米諸国の例に見えるように反動期も備えているのを知るべきである。

〈サンチャゴに雨が降る〉とは蜂起の合言葉のようだが、反語的には死者への鎮魂歌、意志を受け継ぐ者への片身の言葉であろう。（Ｙ記）

野火

☆通知☆神戸の摩耶プリント・神戸共同文庫が移転しました。共同の新住所は

神戸市灘区篠原南町一の二の十三　マヤプリント

電話〇七八ー八八一ー六〇四三　神戸共同文庫

☆お願い☆〈大杉栄ら墓誌建立募金〉大杉栄の墓ではなく、殺された三人（大杉栄・伊藤野枝・橘宗一）の墓誌を立てたいというもの。福岡にあった三人の分骨を収めた墓がゆくえ知れずになっているのでぜひとも、ということです。リベルテールの会に送って下さればまとめて連絡先が定まった時送ります。

☆アピール☆〈江川允通さん裁判〉江川さんが警察に捕えられてはや一年半が経過している。冤罪で無罪かもしれず起訴事実を考えても、おそらく強盗未遂、窃盗、暴行だと思う。にもかかわらず未決ではや一年半が過ぎているのである。過日、裁判官が交代し、五度目の保釈請求が一たん受理された。しかもそれは三〇〇万円という保釈金によってである。しかしながらそれさえも検察側は高裁への保釈請求却下の準抗告を行ない、保釈請求を却下させている。現在江川さんは横浜拘置所で次回公判（七月一日・横浜地裁川崎支部・川崎駅より十五分位）をまっている。裁判の傍聴・通信等をとおして江川さんに支援を。そして江川さんを救援する会にカンパを。

横浜市港南区港南四の二の三　横浜拘置所

江川允通（手紙等、入ります）

小金井市東町五の三〇の二　時田昌瑞方

江川さんを救援する会

☆エスペラント☆エスペラントのＳＴＡの大会が七月中旬ストックホルムであります。その大会の参加者の人達に少しでも日本のことを知ってもらおうと思い、日本語のエスペラントとアナキズムの本を送ることを計画しました。できたら少しでもカンパして下さい。リベルテールの会で送ります。

☆お知らせ☆京都で発行されていた「リベーロ」誌が四〇号よりアナキズム研究センターのニュースとして再出発することにしたそうです。リベーロ誌は情報誌としての性格を持つ機関誌でしたが諸々の事情より再出発を決意したようです。興味ある機関紙だったので少し残念だ。

（京都市左京区中門前町二八の五　リベーロ社）

☆機関紙より☆〈生活者四八号〉生活者誌は「太陽の伝説」を連載している。これは発行者加藤さんの体験の嘆懐を静かにうつしたものである。次号からは表題を変えるようだがその内容は一寿労働者の生活史、寿の最近の

こと、自分の子供達のことなど。
（横浜市戸塚区田谷町一九三一　加藤彰彦
定価年六〇〇円）
＜共同体社会：野中の一軒家改題＞本誌はコミューン志願者の運動誌。共同体の機関誌はいくつかでているがなんとなく、実践報告だけになっていく。実践報告と共同体運動のために頑張って欲しい。
（東京都府中市朝日町一の五の四　十号分一〇〇円
共同体社会をつくる会）
＜遊撃六五号＞遊撃誌は詩のべ平連が反戦詩集をだすあいまに月報として発行されたもの。ベトナムの戦争状態終結により詩のべ平連は集団〝さかさのイロ〟として出発した。詩とコンサートの案内等が載せられている。「小西反軍判裁の会から」では富士フィルムに依頼した反軍の記録フィルムが故意か偶然か光入現象により損害を受けた、抗議と責任の追求を行なっているとのこと。
（東京都小金井市中町三の十二の二二　直昆荘仁号
長谷川修児方さかさのイロ年六〇〇円）
＜黒の手帖二十号＞研究誌的色彩が薄れてきた。情報伝達に紙面をさきたいとのこと、書評のようなものを多くしていきたいようだ。残念。
（東京都新宿区北山伏町三三大沢方　黒の手帖社）
定価三〇〇円　四号分一六〇〇円）
☆紹介☆＜情況五月号：ロッキード犯罪と独占掠奪論・大門一樹）『独占価格はなぜ高いか、なぜ高利潤か、というメカニズムの解明が経済学の仕事になっているが、この掠奪論では「高い」という現象解明だけでなく、それが価格の偽装をとる「掠奪」であるという本質を解明している。従来の理論のように「収奪」などとことばの上で（それも本質の明らかでない概念）レッテルを押しつけるのでなく、この高い価格が「掠奪」であることを『遮断と暴力装置』」という二条件で解明している。」本人の説明です。読んで批判なり共鳴をとのこと。
☆バクーニン特集号☆かねて宣伝のバクーニン特集号は七月号ではなく、リベルテール別冊という形で発行することになりました。発売は八月頃、これは頁数約百五十頁、写真多数。予定価格五百円。リベルテールと別ですので購入希望者は代金そえてリベルテール発行所に申込んで下さい。こういう形になってすみません。
☆リベルテール七月号は望月桂さんの追悼号、約三十頁となります。
（山本）

M・バクーニンよりS・ネチャーエフへ（2）

第二にきみの真摯で疲れを知らない力、献身、情熱と思想力を認めたからなのだ。ぼくはきみを評価したし、きみの周囲に自分の為にではなく運動のために現実的（リアル）な勢力を結集する能力があると現在もみている。ぼくは自分にそう言い聞かせたし、オガレフにもそう話した。あの人達がまだ団結していないにしても、それはすぐそうするよとね。

第三にぼくの知っているロシア人の中でこの事業が遂行できるのはきみを置いて外にいない、そう自分に言い聞かせたし、オガレフに話しもした。別人を持ってはいられないんだ。ぼく達両人は年をとったしきみを外してもっと献身的で能力のある人に会えようとは思えなかった。だから、もしぼく等がロシアの運動と一体になるならきみ以外の他の人とは同盟できないんだ。ぼく等はきみの委員会も団体も知らない。たゞきみを通じてそうしたものに対する意見をもつしかないのだ。きみが真面目なんだから、きみの現在及び未来の友人達で不真面目な人がいると考えられるだろうか？　きみの真剣さがぼくにとっての保証であり、きみは決して価値のない人達を仲間に呼ばないだろうし、ひとりである筈がない、きっと集団的勢力を創出するものと思った。

ぼく達が知り会った最初の日から、真実ぼくを驚かせた弱点をきみは持っている。けれどぼくはそれを重要視していない。それはきみの無経験さであり、人生と民衆についての無知だ。その上神秘主義に境界を接した狂信が組合わさっている。社会状況、慣習、道徳、理念、いわゆる教育のある人びとの社会の通常の感じ方に対するきみの無知はその破壊を視点としてもっていても、この環境の下で有効な活動をするのをきみにとって不可能にしている。きみはその中でどう影響するか力をもつか知らないし、そのためそれと接触することが運動にとって必要なのに、いつでも当然失敗する。その例証は不可能な状況の下で〝鐘〟*（kolokol）を発行しようと不運な試みをしたことでも判る。〝鐘〟については後程言及しよう。人間についての無知は必然的に失敗に導く。きみは民衆に多くを要求し期待しすぎるのだ。彼等の力以上の仕事を与える。それもすべての人はきみを突き動かしている同じ情熱を持っているとの確信によるのだ。それと同時にきみは人を信じない。だから人びとの内部に起きる情熱、きみの目標に対する彼等の帰趨性、別個の公明な献身等は考慮しない。きみは人を屈服させ怖がらせ、大体不十分なことになる外部からの管理に

よって縛りつけようとする。その為、一度きみの手にかかると人はもがいても自由になれないのだ。またそれと同時にきみが態度を改めない限り人は逃げるし、逃げつづけるだろう。ところがきみは人の内部にきみの許に参加しようとする重要な理由があるのをみつけきらないのだ。ぼくがきみをアブレク教徒（an Abrek）だ、きみの教理問答（カテキズム）はアブレク教徒のものだと指摘した時、きみが不快な顔をしたのを覚えているかね？　きみは言った。人はみな自己を完全に放棄し、人間的な意志、快楽、感情、愛情と紐帯を廃棄しなければならない。つまり正常で自然で誰にとってもある日常生活を例外なく放棄しろと言った。きみの意向は今でもそうだが無私の残酷さ、きみにとっては唯一の真に烈しい狂信を日常生活の規範にしたいのだ。きみは不条理、不可能、自然と人間と社会の全的否定を希望する。この意向はきみの力を徒労に終らせ、目標を誤射させる故に決定的な誤りだ。人は例えどれ程強力であっても、社会はその規律がどれ程完全であり、組織がどれ程強力であっても、自然には勝てないのだ。宗教的狂信者と禁欲主義者だけが自然に勝とうとする。ぼくがきみの中に一種の神秘性、汎神的理想主義をみても余り驚かなかったし、その驚きが持続しなかったのもそう理解したからだ。きみの性格の方向性に関連して、ぼくにはそれがはっきりしていたし、全く不条理に思われた。そうなんだ。親愛な友よ、きみはぼく等のような罪人としての唯物論者ではなく、理想主義者、革命僧のような予言者である。きみの英雄はバブーフではなく、マラでさえないのだ。何かサヴォナローラのような人なんだ。きみの思考法によれば、きみはぼく等よりもジェスイット派に近い。きみは狂信者だ。それこそきみの巨大なまた特異な力の出所である。と同時にきみの盲目性もだ。その盲目性が大きく決定的な弱点だ。盲目な活力は誤る、　づく、それが強力であればある程、その大失敗は不可避的で致命的だ。きみには批判感覚がない為に苦しんでいるが、それがなくては人と状況を評価することができず、従って手段と目的を和解させることもできない。

これらの事すべてをぼくは去年知ったし確認していたのだ。けれどぼくは二つの考慮によってきみのためにいいように解釈していた。第一、ぼくはきみの中に立派で完全で純な能力、自愛やうぬぼれの交じったものがないということ、これこそ今までに出逢ったロシア人の誰も持っていないものがあるのを知っていたし（今でも認めている。）第二、ぼくが自分に言い聞かせていたのは、きみは未だ若いのだし、誠実だ、それに利己的な恣意や錯誤さえなければ、いつまでも間違った道に踏迷う筈がない、錯誤は運動にとって致命だから…。今でもぼくはそう思っている。最後に

ぼくにはっきりしていたのは、きみがぼくを信頼するところか、多くの点でぼくの知らない目先の目的に宛て、手段としてぼくを利用したことだ。だがこれだってぼくは少しも気に留めなかった。

最初ぼくは、きみがきみの組織に入っている人びとにつき沈黙しているのが好きだった。というのは、そうした運動では最も信頼できる人達でもそれぞれの仕事の成功にとって、実際に必要なことだけ知っていればいいというのがぼくの考えだ。だからぼくがきみに無用な質問をしかけないようにしむけて呉れたのは当然だろう。きみが義務に反して例え同志の名前を明して呉れたとして、その名前が誰なのか知ってはいけなかったのだ。ぼくはきみの言葉通りにその人達を判断し、きみだけを信じたし現に信じている。きみを絶対に信じているきみと同じような人びとで構成されている委員会は、思うにぼく達を等しく信じるべきなのだ。

質問。きみの組織は実際に存在するのだろうか、またはきみだけがそれを何んとか作ろうとしているのではないか？　もし存在しているなら、それは大きいのだろうか、何らかの勢力を有する生まれたばかりのものか、または全くの希望でしかないのか？　ぼく等の大切な委員会そのものは、きみが説明した通りの形で、生死を賭けた力の結集体なのか—それともきみがそれをこれから作ろうとしているだけなのか？　要するにきみは全くの個人的力を代表するにしか過ぎないのか、それとも既に何らかの集団的力が存在するのかどうか？　そこでもし結社や中央委員会が実際に存在するとして、またきみのような本当の確信を持った熱烈に献身する自己犠牲の人びとだけがそれに（特に委員会に）参加できるとして、別な疑問がある。その集団は、共通の知見や知識を持ち、ロシア民衆と階級の状況や関係性について十分に理論的訓練及び理解を有するかどうか、更にその革命委員会は全ロシアの生活を有効に確保し、社会の各層に本当の力強い組織で浸透しているかどうか？　運動の有効性は参加者の熱烈な活力に依存するし、その成功はその人達の共通の意識と知識に依るのです。

海外だより

香港から馮子昌（Persy Fung）君が来た。香港で70's FRONT から分れてMINUS 9 を出している馮君が、神戸、大阪、京都、富士宮の同志たちと交流して、六月八日（火）東京に来た、同君の友人周君（在京都）と一緒だった。コージでの会に出席して、三里塚訪問も予定に入れていたので、八方連絡して予定のコースを終えて帰った。まだ二十代の若い元気な同志である。今後の発展と生長を祈る。